武蔵野日曜聖書講筵

キリストの奥義
――コロサイ書４章（総括）――

１９９２年６月21日
小池辰雄

天弓山光原愛泉居士　キリスト神秘　神の像　キリストは天国を現じて歩いていた　十字架と聖霊　キリストと一つになっている世界　新人で真人　無即無限無量　ミステリオンの本質は愛　キリストは神の充満者　私にキリストが宿る　自己中心を十字架で赦した　キリストと一体　キリストの奥義は聖霊の愛

【コロサイ４】

1 主人たる者よ、汝らも天に主あるを知れば、義と公平とをもて其の僕をあしらえ。

2 汝ら感謝しつつ目を覚して祈を常にせよ。3 また我らの為にも祈りて、神の我らに御言を伝うる門をひらき、我等をしてキリストの奥義を語らしめ、4 之を我が語るべき如く顕させ給わんことを願え、我はこの奥義のために繋れたり。5 なんじら機をうかがい、外の人に対し知慧をもて行え。6 汝らの言は常に恵みを用い、塩にて味つけよ。然らば如何にして各人に答うべきかを知らん。

7 愛する兄弟、忠実なる役者、主にありて我とともに僕たるテキコ、我がことを具に汝らに知らせん。8 われ殊に彼を汝らに遣すは、我らの事を知らしめ、又なんじらの心を慰めしめん為なり。9 汝らの中の一人、忠実なる愛する兄弟オネシモを彼と共につかわす、彼等この処の事を具に汝らに知らせん。

10 我と共に囚人となれるアリスタルコ及びバルナバの従弟なるマルコ、汝らに安否を問う。此のマルコに就きては汝ら既に命を受けたり、彼もし汝らに到らば之を接けよ。11 またユストと云えるイエス汝らに安否を問う。割礼の者の中ただ此の三人のみ、神の国のために働く我が同労者にして我が慰安となりたる者なり。12 汝らの中の一人にてキリスト・イエスの僕なるエパフラス汝らに安否を問う。彼は常に汝らの為に力を尽して祈をなし、汝らが全くなり、凡て神の御意を確信して立たんことを願う。13 我かれが汝らとラオデキヤ及びヒエラポリスに在る者との為に甚く心を労することを証す。14 愛

する医者ルカ及びデマス汝らに安否を問う。15汝らラオデキヤにある兄弟とヌンパ及びその家にある教会とに安否を問え。16この書を汝らの中にて読みたらば、之をラオデキヤ人の教会にも読ませ、汝等はまたラオデキヤより来る書を読め。17アルキポに言え『主にありて受けし職(つとめ)を慎みて尽せ』と。18我パウロ手づから安否を問う。わが縲紲(なわめ)を記憶せよ。願わくは御恵(みめぐみ)なんじらと偕に在らんことを。

●天弓山光原愛泉居士

昨日は友人のお通夜に行ってきた。私も自分の戒名を考えてみた、

「天弓山光原愛泉居士」

と。私は天界に行く時には大体、示されるから、

「そしたらこういうようにしてくれ」

と書いておく。死んだって、死にはしないですから、大丈夫です。

●キリスト神秘

今日は、コロサイ書の第４章ですが、これは挨拶のところで、内容は大したことはないので、コロサイ書の総括をやります。

「2汝ら感謝しつつ目を覚して祈を常にせよ。3また我らの為にも祈りて、神の我らに御言を伝うる門をひらき、我等をしてキリストの奥義を語らしめ、4之を我が語るべき如く顕させ給わんことを願え、我はこの奥義のために繋(つなが)れたり。」（コロサイ４・３～４）

やっぱり、さすがはパウロですね。祈りはお互いに祈り合うことが大事なんです。パウロがコロサイ書で語っているところの中心は、この

「キリストの奥義」

「ミステリオン　トゥー　クリストゥー」

という言葉です。奥義は「ミステリー」「神秘」という言葉です。

「キリスト神秘」

と言ってもいい。ダイスマンというドイツの学者の『キリスト神秘』という素晴らしい論文がある。「神秘」というのは素晴らしい言葉だ。奥義はもともとギリシア語では神秘です。

コロサイ書は要するにキリスト神秘を中心として語っていますから、第１章からその焦点をつかまえてお話します。

●神の像

「15彼は見得べからざる神の像(かたち)にして、万(よろず)の造られし物の先に生まれ給える者

なり。」（コロサイ1・15）

「キリストは見得べからざる神の像」

という言葉がある。「像（かたち）」は「エイコーン」という字です。神のすがた。神さまは見えない。けれども、神さまはどこに現れたかというと、大自然の中にも顕れてますけれども、一番はっきり顕れたのは、イエス・キリスト自身においてです。だから、キリストは神の現象体なんです。それが、「神のエイコーン」「神のかたち」ということ。

「キリストの存在それ自身が神のかたち」

というミステリオンなんです。だから、キリストを見ようと思ったら、福音書を見なければならない。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を読むと、このキリストの姿が非常によく現れているわけだ。その言葉、その行為に。姿は一つも書いてない。

「キリストはどれくらいの背でどんな顔をしている」

なんて、一つも書いてない。そこが素晴らしいんです、聖書は。普通だったら、大体、その人の見た形なんかを書くわけだが、何も書いてない。「目がどうだった」とかは一つも書いてない。ところが、福音書を読むと、その全存在においてキリストの姿というものが、表現できない表現として現れているわけだ。ところが、普通はみんな、このキリストの姿が見えない。それだから、キリストに躓いている。弟子たちも躓いた。現れながら、隠されている。不思議なものだ、これは。キリストの姿が見えるためには、聖霊の光によらなければ見えない。また、その行為がわかるためには、聖霊によらなければ分からない。そのことはキリスト自身が言っておられる。

「御霊が来たら、私の言ったりしたりした事がお前たちはみんな分かるぞ。それまではダメなんだ」

と。一緒にご飯を食べても、一緒に歩いても、キリストは皆に本当は見えてない。そういう驚くべき存在です。だから、神の像（かたち）という。

パウロというのは、どうも現実のキリストには会わなかったらしい。後からキリストを信じたところの信者たち、使徒たちを迫害していた。けれども、パウロというのは、もの凄く旧約のチャンピョンだし、パリサイのチャンピョンだから、

「このチャンピョンをひっくり返してやろう。とんでもない間違いをしている」

と、とうとう復活のキリストがパウロをひっくり返してしまった。

「何ぞ、われを迫害するか！」

と。それで、

「我が目より鱗の如きもの落ちたり」

と、やっと目が覚めた。本当の真眼が与えられた。そうしたら、キリストが見えてきた。それだから、パウロが、

「見得べからざる神の像」

ということをここで言っているわけだ。このパウロという人物が出なかったら、新約聖書は成り立たない。それくらい驚くべきお弟子さんなんだ。だから、キリストがこれをひっくり返してしまった。大変な霊止です、イエスというひとは。

●キリストは天国を現じて歩いていた

ですから、コロサイ書1章15節の、

「**神の像（すがた）である**」

という、その像をいずこにおいて見るかといえば、福音書で我々は見る。

『聖書は大ドラマである』（小池辰雄著作集第十巻）という本を書いたでしょ。福音書ぐらい驚くべきドラマはない。キリストは天国を現じて歩いていたんだから。イザヤ書35章を展開しながら歩いておられた。最後には、イザヤ書53章になった。十字架。だから、私は

「35／53」（53分の35）

と書く。「53」は十字架、「35」は天国的な現実です。「53」と「35」は不思議な数になっている。旧約聖書のイザヤ書というのは旧約の第一の書です。イザヤ書35章を展開しながら歩いておられた。最後には、イザヤ書53章になった。十字架。だから、私はだと言ってもいいくらい、この中にすべてが入っている。

それが、第1章の焦点です。そして、その像をパウロはまた別の言葉で、18節で、

「18**而して彼はその体（からだ）なる教会の首（かしら）なり、……**」（**コロサイ1・18**）

と、キリストを信ずるところの集まりが即ち教会です。『教会の誤解』という本をブルンナーが書いた。

「聖霊がなければ教会ではない。今の教会はいい加減だ。本当の教会というのは原始キリスト教の場合の教会で、どれだけの長老がいて執事がいて、どうのこうのと、そういうことではない」

と、ブルンナーがはっきり言った。皆、平信徒で結構だ。問題は、

「そこに聖霊が本当に通（かよ）っているか」

それだけです。教会が形式になったものだから、内村先生が無教会というのを始めた。けれども今度は、無教会には聖霊がないから、ダメなんだ。

「十字架、十字架」

と言っているけれども。本当に十字架を受けとれば聖霊は来るのに、十字架が観念化しているものだから、聖霊が来ない。

●十字架と聖霊

十字架と聖霊をはっきり言っている人がほとんどいないんだ。困ったものだね。その焦点となる句は、ルカ伝12章49節です。

「**我は火を投ぜんために来たれり**」

火というのは聖霊のこと。

「この火燃えたらんには、何をか望まん」

もう望むものはないんだ、と。

「けれども自分には受くべきバプテスマがある」

十字架のことです。

「思いせまること如何ばかりぞや」

と。このルカ伝12章49節というのは、キリストの火の出るような句です。これをいい加減にしたら困る。「十字架、十字架」と言ってみたり、ただ「聖霊、聖霊」と言ってみたり。どっちもダメなんだ。

「受くべきバプテスマを受けてから、それから、お前たちに聖霊を臨ませる」

とはっきりキリストはその順序を言ってらっしゃる。聖霊はペンテコステでやって来た。

私はドイツの教会へ行って、しゃべってやりたいくらいだ。ドイツの教会も今はしょうがないから。私は、自分の主観的な確信でないから、はっきりものが言える。「かく信じている」なんて、そんな自分の信仰なんか当てにしてませんから。

キリストが首（かしら）で、我々は、教会はその体（からだ）である。身体も、皆それぞれの役割を自ずから持っているわけだ。クリスチャンは使命のある存在なんです。

「人に何とかしてキリストを証（あかし）しよう」

と。証しなかったら、それはクリスチャンではない。存在そのものをもって証していかなければ。今は、遠慮は要らない。

●キリストと一つになっている世界

ペテロもパウロも、

「我を視よ！」

と言った。そのわれというのは、

「キリストの中にいる、この私を見なさい」

ということです。

「私の中にあるキリストを見なさい」

と。パウロはこの、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という角度の言葉を何回も、145回か、語っている。それくらい、キリストと一つになっている。一つとなっている世界が本当の信交の世界だ。一如、即如ともいう。だから、「しんこう」の「こう」の字を、私は仰とは書かない。交と書く。いつまでも仰いでたってダメなんだ。キリストとの霊的な交わりの世界に入らなければ。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というのは、この「信交」の方です。初めは、仰いでたってしょうがない。信仰の仰は初めのことなんだ。

こういう私みたいなつむじ曲がりは、ちょっと他にはいないらしい。仕方がない。本当のことを言っているんだから。どうせ、私は例外者なんです。どこへ行っても、相手にされない。結構です。パウロが天界から

「ああ、そうだ」

と言ってれば、もうパウロ一人でたくさんだ。パウロも、実は驚いているかも知れない。そういう、キリストとの一つの世界を本当にやったのが賀川豊彦です。

「24**われ今なんじらの為に受くる苦難（くるしみ）を喜び、大変なもんだ、パウロはローマの牢屋の中にいるんだから、**

又キリストの体なる教会のために我が身をもてキリストの患難（なやみ）の欠けたるを補う。」（コロサイ1・24）

「キリストの患難の欠けたるを補う」

という言葉は躓きになる。

「キリストは患難がちょっと足りなかったか」

なんて、そうではない。

「キリストの患難の続きをやってます。キリストの患難の続きを受け継いでいます」

ということだ。キリストが、

「十字架を負え」

と言われた。パウロは正に十字架を負っている。賀川豊彦も十字架を負った。

私はギリシア語も読めますけれども、何もそんなことで、ゴタゴタ言っているのではない。

「パウロの表現の奥は実はそういうことなんだ」

ということを、御霊の力で、御霊の光で見ているわけです。

「続きを受け継いでいる」

と、全くその通りなんだ。欠けてはいない。キリストの患難というのは、十字架というのは患難の極致だから。

●新人で真人

「26これ神の言、すなわち歴世歴代（よよよよ）かくれて今神の聖徒に顕れたる奥義を宣（の）べ伝えんとてなり。

ここにも「奥義」「ミステリオン」という言葉が出ている。たくさん出ているんです、このミステリオンという言葉は。

27神は聖徒をして異邦人の中なるこの奥義の栄光の富の如何許（いかばかり）なるかを知らしめんと欲し給えり。此の奥義は汝らの中に在（いま）すキリストにして栄光の望（のぞみ）な

り。」（コロサイ1・26～27）

「奥義はキリストにして」

とはっきり言っている。

「キリストがミステリオンそのものだ」

ということです。

マルティン・ルターもカトリックの出身なんだ。身が出てしまった。カトリックの忠実な人なんだけれども、やっているうちに自然に出てしまった。出ざるを得なくなってしまった。改革者というのは皆そうなんです。ところが、改革者のエピゴーネン、亜流というのが、それをマネしているのがいる。人真似はダメなんだ。あなた方自身が自己改革をしていくと、あなた方自身が本質的に、一人一人が改革者である。己を乗り越えることが改革なんだから。常に新たに己をのり越えていく。

「新しき人を著よ」

なんて、このコロサイ書にも書いてある。古びないところの新人、「カイノス」なんだ。普通のものは古びるけれども、この新人は真人なんだ。本ものだ。キリストにひっくり返されると、本ものになる。それは新人で真人でもある。

あなた方、聞いていて、楽しいですか？　楽しくなければダメだよ、しかめっつらして聞いていたのでは。

「楽しくてしょうがない、燃えてきました」

ということにならなければ。

●無即無限無量

今、読んだところに、「奥義」という言葉が三回出ています。

「此の奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望なり」

新天新地の時の栄光の望である。望が現在するんです。ロマンチックにただ望んでいるのではない。神さまの新天新地が我々の中に既に来ている。キリストを受けとると――相対的現実がどんなに暗くあろうが、混沌としていようが――そこにもう、光でつき破ったところの天国が、パラダイスが現ずる。自分でパラダイスを現じながら歩いているんだ。それがクリスチャンだ。

「あの人といると、何だか楽しいな」

なんていうことになる。

「[28]我らは此のキリストを伝え、智慧を尽して凡ての人を訓戒し、凡ての人を教う。これ凡ての人をしてキリストに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん為なり。」（コロサイ1・28）

「キリストに在りて全くなる」

と、これは困った。キリストに在れば、完全的な性質がくるんです。人間は地上にある限り、完全そのものではない。完全性というのが大事なんです。三日月を見て、皆さんは欠けていると思うけれども、三日月というのは欠けていない。三日月は満月を抱いている。上弦の月は満月という完全性を持っている。だから、三日月の形において、完全性を見なければ、本当は三日月を見ているのではない。

上弦の月は段々満月になる。下弦の月は段々欠けていく。けれども、私に言わせれば、下弦でも結構なんだ。これは今に無くなる徴だ。無の相（すがた）なんです。下弦の月は無の相、上弦の月は全の相。無と全は同じだ。

All or nothing　（全か無か）

ではない。

Nothing is all　（無は全）

です。all と nothing とは同じことなんです。自分が無我になるというと、それは天的な全我になる。全我は霊我だ、霊的な我。これは私がない、無私の世界です。この無私の世界をくださったのが、十字架ですから。

「お前は、我執から取ってやったぞ、十字架で。相対的なお前は何だっていい。そんなものは気にするな。これを見よ。無私の根源現実を感謝せよ」

と。それを本当に受けとると、今度は、全我が出てくる、聖霊の我が。だから、私は

「無即無限無量」

と言っているのはそのことなんです。相対的現実の小池は決して無ではありません。けれども、その奥に絶対的な無の我がある。これが、本当の全を受けとるから、もの凄い力がくるんです。

あなた方、そういう根源現実が分かるかね？　分かるといったって、頭ではないけれども。受けとってくださいよ。もう、集会をいつまでやっているか知らんけれども。

「一回毎にもうこれ限り」

という気持で私はやっている、いつぶっ倒れたっていいんだから。

●ミステリオンの本質は愛

２章にくると、ここでも奥義と言っている。

「[2]**斯く苦心するは、彼らが心慰められ、愛をもて相列（あいつら）り、全き顛悟（さとり）の凡ての富を得て、神の奥義なるキリストを知らん為なり。」（コロサイ２・２）**

この「知る」という言葉は決して頭で知ることではないから、間違わないでください。

「全存在で受けとる」

ことを「知る」という。体受、体で受けとること。みんな言葉に躓くんだ、

「これはどういう意味だ？」

なんて、意味ばっかり考えている。意味ではないんだ。現実を受けとらなくては。言葉なんてのはみんな暗号なんです。

「この暗号は何を指しているか」

ということです。

キリストの愛の体現者として、私は賀川豊彦以上の人を知らない。人の在り方はいろいろだから、何も賀川豊彦の真似をすることはない。真似をすることはないけれども、それぞれの質において、キリストの愛を生きていなかったら、つまらんんです。

キリストというミステリオンの根源的な本質は、この愛です。

「神は愛なり」

という、その愛なんです。

「どんな動物の中にも神の愛が来ている」

と、ゲーテが言っている。光も愛の光です。太陽は地球をこんなに愛の光で照らして、生きとし生けるものに生命を与えている。大自然も素晴らしい。その大自然を人間は大分損（そこ）ねた。この頃になってやっと、

「地球的な問題だ」

なんて言って騒ぎだしている。ちょっともう遅いよ。遅いけれども仕方がない。地球を損なって、植物がおかしくなったら、動物は死んでしまう。もちろん人間もダメになる。地球を害（そこな）うことは自殺行為です。

「自然を征服せよ」

なんて、何を言ってるか。

「自然とは親しまなければいかん。自然を勝手に利用していると、そのうちに人類は困るぞ」

と、もう予言しているよ、ゲーテという人は。

人本主義はダメなんだ。神本（もと）でなければいかん。神が本でなければ。人本主義的な民主主義なんてものはダメです。だから、ゴタゴタやっているでしょ。皆さんは、この聖書の生きた本当の真理で毅然として立ち、また、悠然として凡てを包括するような、でっかい魂になってくださいよ。

「どうだ、こうだ」

といって区別しているようなところはダメなんだ。全部、包摂してしまう。だから、

「神さまは雨を凡てのものに、善き者にも悪しき者にも降らせ、陽を直き者にも直からざる者にも照らしている」

と、これがキリストの言葉の一番大きな言葉です。そういう愛には相手が参るんです。

「愛は最大の力」

というのは、そういうことなんです。それを受けとらなければ、受けとらない方がただ自

分で滅びていくだけの話です。裁いているのではない。せっかく恵みを与えようとしているのに、恵みを受けとらなければ、滅びてしまう、自分で自らを裁いているだけの話だ。大体、政治家、権力者なんていうのはそういうのが多い。昔からそうだ。徳川の封建時代なんていうのは、悪い奴ばっかりだ。みんなそういう奴は地獄へ行ってしまっている。お気の毒さまと。苦しめられた方が天国へ行ってしまっている。神さまの審判には間違いない。損も得もありはしない。本当のところを生きていくだけのことだ。

新約聖書は本当に無駄がない。驚くべき本だ。旧約にはいろんな無駄がある。新約聖書にかなう本が世界中にない。本当に新約聖書というのは御霊の力、光で書かれた書だね。みんな、愛読しているかね。

●キリストは神の充満者

「9**それ神の満ち足れる徳はことごとく形体（かたち）をなしてキリストに宿れり。**」（コロサイ2・9）

と、パウロらしい言葉だ。原文には徳という字はない。徳なんてのは勝手に作った言葉だ。「神の充満は」という。プレローマです。

「神さまに満ち足りているものがキリストの中に宿っている。キリストは神の充満者である」

ということです。キリストは神の充満者だから、「自分は充満している」なんて仰らないんだ。

「私は何もできない、何も言えない、少しも善くはない」

と、完全に自分を否定している。ということは、

「私の中にあるものは全部、神さまのものだ」

と、こういうわけだ。だから、サタンと戦う時に、キリストは自分の、いわゆる霊力で戦いはしない。みんな神さまにお任せしている。それで勝ってしまった。充満しているから、

「神さまが言えということを言わざるを得ない」

と。ざるを得ないんです。

「神さまが為せという事を為さざるを得ない」

力がくるから。全部、止むにやまれずしている行為であり、止むに止まれざるところの言葉である。選択してものを言っているのではない。本当の必然、天的必然は本当の自由の世界です。必然と自由は同じものであります。偶然ではないんだ。

テニソンの「インメモリアル」という長い詩があるが、あの中に、

“Our wills are ours,
to make them Thine.”

「我々の意志は我々のものであるが、
これは貴方のものとせんがためのものである」

この to make は、

「それは貴方のものとなりました」

という結果に訳したって構わない。

「貴方のものとなると、この意志は天的な意志になるから、本当の自由だ」

と。自分に捕らわれないから。

学校の教育が、そういった次元の教育ができなければダメなんだ。だから、先生方が本当の信仰を持たなければ、教育なんかできない。

●私にキリストが宿る

「充満が形をなして、キリストに宿っている」

と。こういう言葉を読んで楽しくないですか、皆さん。

「私にもキリストが宿ってしまって、楽しくてしょうがありません」

と。

「キリストが宿るには、まだもったいない」

なんて、そうじゃないよ。ダメだからキリストはやってくるんだ。ダメでない所にはやってこないんだ、キリストは。我々はみんなダメだから、キリストは、

「よし、お前の中に入るぞ」

と。我々は、

「どうぞ、お入りください」

と受け入れる。そこで遠慮してはダメだよ、あなた方。

「まだ私はもう少し聖書を勉強してから、もう少し人を愛してから」

なんて、そんな事は一つも条件は要らない。キリストを入れると、聖書の勉強も、人を愛することも本ものになる。十字架という門を通って、キリストの中に入ると、そこは詩篇23篇みたいに、

「緑の牧場、憩いの水汀（みぎわ）」

ということになる。新約の光で、旧約の素晴らしいところを読むと、またいい。旧約は旧約で、そういう善さをもっているから。ただキリストの光で見なければダメだ。

「11 汝らまた彼に在りて手をもて為ざる割礼を受けたり、即ち肉の体を脱ぎ去るものにして、キリストの割礼なり。

何ですか、「キリストの割礼」というのは。古き我に死んで新しき我に甦ることです。そのことはすぐ後に書いてある。

12 汝らバプテスマを受けしとき、彼とともに葬られ、又かれを死人の中より甦えらせ給いし神の活動（はたらき）を信ずるによりて、彼と共に甦えらせられたり。」（コロサイ２・11～12）

これが、さっき言った新人であり、霊人、霊我である。

禅宗の方で「身心脱落」という。身も心も脱落する。キリストにあっては、この脱落ができている。十字架を本当に受けとると、この新人、死んでも死なない我になる。

「天弓山光原霊泉居士」

になる。これを昨日の晩、パッと思いついて、楽しかったね。友人のお通夜から帰って来てから、そういう真理にぶつかる。

もちろん、私は仏教の一流の坊さんたちは尊敬します。素晴らしいです。仏の世界で即如の世界に入っているから。

●自己中心を十字架で赦した

13汝ら前には諸般の咎と肉の割礼なきとに因りて死にたる者なりしが、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を赦し、

「凡ての咎を赦し」なんて、何も数えることはないんだ。

「我執を赦す」

ということです。凡ての咎は要するに、人間は我執なんだ。自己中心、エゴイズムということ。エゴイストであることを十字架で赦した。それだから、

14かつ我らを責むる規の証書、すなわち我らに逆う証書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、

と、ちゃんと書いてある。そして、

15政治と権威とを褫ぎて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給えり。

と、素晴らしい。ここで政治と言っているのはサタンの勢力だ。徳川三百年も、これはサタンの政治だ。諸大名を参勤交代なんかさせて、威張りくさって、悪い代官なんか置いて、あれで非常にマイナスだ。

16然れば汝ら食物あるいは飲物につき、祭あるいは月朔あるいは安息日の事につきて、誰にも審かるな。

旧約の角度から審かれることがない、ということを言っている。

17此等はみな来らんとする者の影にして、

旧約は「来らんとする者の影」だと。

其の本体はキリストに属けり。

旧約の世界は影で、だから、

「私は聖霊を受けたら、ベールがとれてしまった」

と言うのはそういうことなんです。

18殊更に謙遜をよそおい、御使を拝する者に汝らの褒美を奪わるな。斯る者は見し所のものに基き、肉の念に随いて徒らに誇り、

「肉の念」というのは自我、我執のことです。

19首に属くことを為ざるなり。全体は、この首によりて節々維々に助けられ、相聯り、神の育にて成長するなり。」（コロサイ２・13～19）

●キリストと一体

「1汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、

パウロは、よく「もし、もし」なんて、使うんだけれども、本当は「もし」なんて要らない。

「汝らはキリストと共に甦らされているのだから」

と、はっきり言ってもらいたい。「もし」なんて言わないくていい。

「そうだろ。だから、上にあるものを求めよ」と。

キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。

「右に坐する」という言い方は、こういう言い方をするだけの話です。

2汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、

だから、私はみな号に天を付ける。けれども、天と言っても、天と地とは一つとなっている。天地融合の世界です。

「神の国は汝らの中にあり」

ですから。

「天は汝らの中にあり」

だ。天が下って我々の中になければ、いくら天といっても、しょうがない。天地一如です。新天新地そのもの。

「そうか、地上の事はそんなに忘れて、天上ばっかりか」

なんて言って、うわっつらになったらダメですよ。天界を地上に下ろして、天界を自分でそこに現じていかなければ。パウロのこういう言葉に、また躓かないでくださいよ。

3汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在れば

なり。」（コロサイ３・１～３）

そうでしょ。キリストと一緒に神の中に隠れて、そのキリストは聖霊のキリストとして、私たちの中に宿ってくださる。この聖霊のキリストとして――キリストの聖霊でもどちらでもいい――我々の中に宿って、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、散々パウロが言っているのが、これが奥義の姿なんです。ミステリオンの姿は、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という、

「キリストと一体」

となっている姿。これが簡単に言うと、奥義の、ミステリオンの内容です。なるほど、信

仰なんて言わなくてよかった。

「キリストと一つ」

でいい。それが本当の世界だ。信仰なんて言うと、反ってゴタゴタになってしまう。

「汝の信仰、汝を救えり」

とは、

「私がお前の中に入ったから、お前は力がきた。それが救いとなった」

ということだ。「汝の信仰、汝を救えり」というキリストの言葉にまた躓く。だから、聖霊が来ないと、聖書の言葉にも躓く。そして、なんだかんだと、議論をしている、ディスカッションをやっている。ご苦労さんな話だ。私はディスカッションが嫌いだ。ドイツ人はディスカッションが好きだよ、すぐ議論する。

「議論で結論が出たって何になるか」

と、いいたい。そんなことではない。

私が地上を去ってから、やっと本ものは分かるでしょう。

●キリストの奥義は聖霊の愛

「9互いに虚言を言うな、

偽りというのが一番いけない。偽りの方が、策略、策謀の方が盗みよりか悪い。政治家なんてのは偽りが多い。

「政治家が一番悪い」

とグラッドストーンが言っている。19世紀の大政治家はリンカーンとグラッドストーンとビスマルク。20世紀では、第一人者はゴルバチョフだな。とにかく、あの唯物主義の共産主義をひっくり返してしまったからね。歴史的には、共産主義の中にももちろん真理はあったけれども。それが硬化現象を起こしてダメになってしまった。

汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎて、10新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを造り給いしものの像に循い、いよいよ新になりて知識に至るなり。」（コロサイ3・9～10）

「新しき人を著る」という言い方をしている。「知識に至る」と、妙な言い方をしている。知識という日本語の訳が困る。これがまた躓きになる。「エピグノーシス」というのは「霊知」なんです。「知識を越えたもの」という意味です。本当の悟りの世界です。「新人を著る」と言うけれども、「新人が中にある」と言ってもいいと私は思う位です。着ると、また脱いでしまうが、中にあると脱ぎようがない。

「13また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。」（コロサイ3・13）

「我々がキリストで十字架で赦されている」

ということは、徹底的な赦しなんです。十字架で徹底的に赦された者は、相手の人がどんなであっても、赦すことができるはずです。それを受けとらなければ、仕方がない。「赦す」をもう一つ越えると、「愛する」ことになる。

「敵をも愛せよ」

とは、愛するというのは、

「敵をも救う」

ということなんです。敵を助けてやるんだから、敵は参ってしまう。戦争だって、敵が死にそうになっていたら、担いで病院に持っていってやればいい。それをまた殺してしまうようなことではダメなんだ。本当の武士道精神というのはそういうものだ。日本が中国と戦った時には、もう武士道精神なんかどこかへいってしまっていた。それから、庶民をたくさん殺すようなことをしたら、本当に動物よりか悪い。

単なる道徳の世界では人間というのはどうにもならない。万人は救いを要する。万人は本当の宗教を要する。インチキな宗教があって困るけれども、白きサタンみたいな奴がいて。日本語の訳が時々、困るんです。例えば、17節、

「17また為す所の凡ての事あるいは言あるいは行為みな主イエスの名に頼(よ)りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」（コロサイ３・17）

「キリストの名によりて」ではない。

「キリストの名に在りて」

です。「名の中に在って」やらなくてはならん。「名によって」というと、一つの手段みたいだ。これは、

「聖名に在って」

です。「の中」にいなくてはダメなんだ。パウロもペテロも皆、聖名に在ってやっていた。聖名によってやったのではない。

「名の中に在る」

ということは、

「実体の中にある」

ということだ。キリストの名と実は同じことだから。名実相即しているから。或る人の名というのは、その人の全存在を表している。

「キリストの存在にあって」

ということと同じことだ。

それで、コロサイ書の要点は摘んだ。要するに、奥義が中心となってパウロは語っている。キリストという奥義の実体を中心にして。その奥義の中身は愛である。そして、それは霊である。「聖霊の愛」である。